

前田河広一郎「二十世紀」論 ——在米日本人作家の再評価——

鍵本 有理 高橋 美帆

A Revaluation of Koichiro Maidako's English Writings: A Study of "The Twentieth Century"

Yuri KAGIMOTO and Miho TAKAHASHI

Koichiro Maidako (1888-1957) wrote novels and essays in English during his days in the US (1907-1920). One of those, "The Hangman", deals with "The Alleged Plot against the Emperor of Japan" which was shocking both inside and outside Japan. This paper surveys how the matter was regarded in the US through the contemporary newspapers, and introduces Maidako's other English novel "The Twentieth Century" and its influence by the writings of Emile Zola (1840-1902), with its first Japanese translation.

はじめに

前田河広一郎（1888（明治21）年～1957（昭和32）年）は、1921（大正10）年、「三等船客」で文壇の注目を集め、以後プロレタリア作家として活躍する。

しかしこれより前、およそ19歳から32歳の13年間にわたる在米時代に、彼は英文で短編小説や詩、評論を発表していた。それらは主に現地アメリカの社会主義雑誌（あるいはその立場をとる新聞等）に発表されたということもあり、彼の遺稿となった自伝『青春の自画像』（1958年5月、理論社）には記述があるものの、長く埋もれたままになっていた。

最近、その中でも実質的なデビュー作といえる“The Hangman”（「絞刑吏」）が藤沢全によって紹介され¹⁾、また西村頼男による資料発掘²⁾、中田幸子『前田河広一郎における「アメリカ」』（2000年10月、国書刊行会）など、主に英文学研究者からの研究が進んでいる³⁾。

本稿では“The Hangman”の題材となった日本の「大逆事件」が、アメリカでどのように受け止められていたか、また最近紹介された前田河の作品“The Twentieth Century”（「二十世紀」）と併せ、この二つの作品とエミール・ゾラとの関わりについて論じる。

1、“The Hangman”の周辺 —大逆事件の海外における報道—

1.0 “The Hangman”と大逆事件

“The Hangman”について、前田河は自伝『青春の自画像』で、「これが、私のアメリカでの処女作で、もちろん幸徳事件をねたにして、あまり知りもせぬ刑吏を扱ったものだった。」（p 116）と述べている。あらすじを簡単に記しておく、

ミカドの退位を企てたかどで社会主義者たちが逮捕された東京。マツとその妻が神田から東京郊外に越してくる。彼らは同志が監禁されている巣鴨拘置所に近いところで、できるだけ同志の消息を得ようと思ったのであった。家主は年配の独身男で、毎朝、この間借り人に留守をまかせて、出勤していく。また彼は、この夫婦の居所を突き止めて早速やってきた警官から夫婦をかばってくれ、社会主義者についても理解を示す。穏やかな日々が過ぎていくが、1911年1月24日、社会主義者たちが絞首刑に処せられた夜、家主は泥酔し、自分が社会主義者たちに手を下した絞刑吏であることを告白して家を飛び出す。翌朝、マツと妻は、亡くなった仲間を葬ろうと訪れた谷中の墓地で、絞刑吏が凍死しているのを見つける。

というものである。

藤沢全は、この作品の紹介とともに「処断された刑死者を直かに描くことをせず、その逆の側、すなわち国家権力の側の末端公吏たる絞刑吏の同志としての悲劇を

仮構化した“大逆事件小説”』と評し、また、

前田河広一郎は大逆事件に関する情報を、シカゴにいる邦人の同志（金子喜一）や現地の社会主義者（フロイド・デルタ）や欧米のマスメディアの報道を通して相当迅速に把握していたふしがある。したがって、“The Hangman”の冒頭にある“The Government, irritated by the protests of foreign papers,....”などとある地の文の一節も、諸外国からの警戒の目を気にする日本政府の対応ぶりを直截に描出したものといえ、その情報の量も質も多分に確かなものであったことが了解されるのである。

と述べている⁴⁾。また主人公の絞刑吏については、実在の絞刑吏に関する新聞記事の検証から、創意によって描かれたものとしている。

そこで、前田河が大逆事件をどのように知ったのか、その状況を明らかにしてみたい。まず『青春の自画像』には次のような記述がある。

そういうふうには、深い雪を踏んで、山田の家に留守な武ちゃん（＝高橋武、引用者注）を訪ねて、無駄足をしての帰りに、何やらそんな気がしたので、その日の夕刊を買って、大ミダシに眼をやると、『Jap』という字と『Anarchists』という字と『Kill』という字とが、いきなり重なりあって眼の中へ飛びこんだ。よく読むと、『日本政府は十二人の社会党員を絞殺刑に処し、十二人に終身刑を課す』ということだった。（中略）とうとう日本という国の存在が、世界の上にあられた。日露戦争以来久しいことである。（中略）

『幸徳秋水、菅野スガ子、森近運平、大石誠之助、宮下太吉、新村忠雄、古河力作、奥宮健之、成石平四郎、松尾卯一太、新見卯一郎、内山愚堂』

ローマ字の綴りを、やっとな邦字になおしてみても、この十二人が一月二十四日に殺されたのだ。この裁判は、公判とは云っても、はじめから刑は定まっていた、裁判長にはちゃんと誰と誰とが死刑になり、誰と誰が減刑になるかはわかっていた。弁護士はあったが、ほとんど発言はゆるされず、申立てた被告側の証人は一人も登場せず、いわば闇から闇への裁判であった。それから、十二人の無期懲役者の氏名を挙げて、その記事は終っていた。（pp 113～114 「幸徳事件」）

この記述からすると、時差を考えて、早ければ現地1月24日の夕刊の記事ということになる。

しかし、「何やらそんな気がしたので」ともあり、藤

沢のいうようにこれ以前、すでに事件について知っていたことがほのめかされている。

それでは、現地における大逆事件の報道はいかなるものであったか。まず事件の経過をふりかえっておくと、以下ようになる。

1910(明43)年 5/25 宮下太吉等逮捕
6/1 幸徳秋水等逮捕
11/9 公判開始決定
12/11～29 公判
1911(明44)年 1/18 死刑判決
1/24 幸徳秋水等絞死刑(12名の処刑は24・25の両日にわたってなされる)

この事件について、今なお明らかではない点も多いが、近年新資料の紹介などもあり、『「大逆事件」関係外務省往復文書』(山泉進・荻野富士夫 編解説、1993年1月、不二出版)では、大逆事件の国外報道と、それに対する日本政府・外務省の対応について解説がなされている。以下、その中から、アメリカを中心に、海外における報道についてたどり、また「ニューヨーク・タイムズ」紙に掲載された記事の調査結果を記す。

1.1 海外における最初の報道

日本国内では、当初「大逆」事件としての報道は秘せられており、「爆弾」「陰謀」事件としてのみ報道されていた。「大逆事件」として報道されはじめたのは9月21日から22日である。

海外における第一報は、日本での報道を受け、ロイター電を通じて9月22日（日本時間では23日）、すでに欧米諸国の各紙に報道がなされている。アメリカのものに絞ってみると、「ニューヨーク・トリビューン」には、“PLOT TO KILL THE MIKADO: Conspiracy Reported in Japan - Many Arrests Made”と題して、次のような記事が載せられている（下線部は次の「ニューヨーク・タイムズ」の引用部と同じ表現が用いられた箇所）。

A sensation was caused by the publication this afternoon of the alleged details of a plot among his own subjects to assassinate Emperor Mutsuhito.

The startling story appeared in the “Hochi,” which says that the plotters, who are now under arrest, will be sentenced to death after trials before a special secret court.

(訳) 本日午後、臣民の間に睦仁（明治）皇帝を暗殺

する計画が立てられていたことが明るみになり、衝撃を巻き起こした。

驚くべき記事が報知新聞に載った。その記事によると、陰謀者たちはすでに逮捕されており、大審院へ進む前段階の裁判で、間違いなく死刑を宣告されるだろう、ということだ。

これは、9月21日付の報知新聞の記事を終始まとめた内容となっている。ここで強調されているのは、皇帝暗殺が臣民により企てられたのが、「皇史上初」であったことである。

This is the first time in the history of the country that the life of the sovereign has been plotted against by his own people and the fact known.

(訳) 皇帝の命が臣民によって狙われ、その事実が公表されたことは、皇紀始まって以来初めてのことである。

ほぼ同じ表現が9月22日付の「ニューヨーク・タイムズ」にも見られる(以下の引用下線部)。こちらは、“PLOT AGAINST LIFE OF JAPAN’S EMPEROR: First Such Conspiracy In the 2,500 Years of the Country’s history”と題され、「ニューヨーク・トリビューン」と同様に報知新聞の内容をまとめ、見出しからして「皇史上初の暗殺計画」という点が同じく強調されている。

TRAITORS CAUGHT; TO DIE: News Was Kept Secret Until Yesterday and Has Created a Sensation in Tokyo.

The startling story appeared in the Hochi Shimibun, which states that the plotters, who are now under arrest, will certainly be sentenced to death after trials before a special secret court.

This is the first time in the history of the country that the life of the sovereign has been plotted against by his own people and the fact has been known.

・ ・ ・ ・ ・

In all the 2,500-year-old history of Japan, so it is declared with pride by Japanese historians, the reverence of the people for their sovereign has been such that there has never been a plot against the life of an Emperor.

(訳) 「日本国皇帝暗殺計画：皇史二五〇〇年来、初の

陰謀」「反逆者は捕らえられ死刑：この報道は昨日まで伏せてあり、東京に衝撃を引き起こした。」

衝撃的な記事が報知新聞に載った。その記事によると、陰謀者たちはすでに逮捕されており、大審院へ進む前段階の裁判で、間違いなく死刑を宣告されるだろう、ということだ。皇帝の命が臣民によって狙われ、その事実が公表されたことは、皇紀始まって以来初めてのことである。(中略)

二五〇〇年の日本史において、日本の歴史家が誇りを持って断言するように、臣民の皇帝に対する崇敬は同じだけ続いてきたものであり、皇帝を暗殺する企てなどこれまで一度もなかったのである。

さらに「ニューヨーク・タイムズ」では、「ニューヨーク・トリビューン」よりも詳しくこの事件の概要を述べている。その記述で注目すべきは、天皇制に反する思想として社会主義思想および無政府主義が挙げられていることである。

Within the last few months there have been various indications that some of the Japanese are abandoning their ancient attitude toward the Mikado and are becoming imbued with Socialistic and Anarchistic ideas. In July it was reported that a band of Anarchists in Tokyo had been manufacturing bombs. It was added that every known member of the band had been arrested, and that, to the amazement of the authorities, when the prisoners were examined they continued to declare their disbelief in rulers and government.

(抄訳) ここ数ヶ月、日本人のなかに、古来から続く皇帝に対する崇敬を放棄して社会主義思想と無政府主義に染まりつつある者がいると指摘されてきた。七月には、東京で無政府主義者グループが爆弾を製造している、という報告があり、さらに、そのグループのメンバーとして知られる者は全員逮捕された。だが、彼らは取調べを受ける際、統治者と政府への不信を露わにし続けたのである。

1.2 公判開始決定後(11月9日以後)の報道

外務省資料にも、各地大使から、現地での新聞報道についての報告があり、各国で注目されていたことがわかる。しかしこれ以前すでに片山潜により、7月から8月にかけて、諸外国の社会主義者に、日本で弾圧が厳しくなっていることや「大逆事件」であることが伝えられてい

た(『「大逆事件」関係外務省往復文書』解説 p8)。

さらに、11月9日に公判開始決定が発表された後、10日に国内の各紙が一斉に「大逆事件」として報じ、その際幸徳秋水以下26名の氏名も公表された。同時に海外でも各地の新聞で報じられている。『「大逆事件」関係外務省往復文書』には、アメリカの在ポートランド帝国領事館から郵送された、11月9日付の現地夕刊「イヴニング・テレグラム」の切り抜きが収められている。以下に見出しと記事の一部と全文の抄訳を示す。

26 ANARCHISTS TRIED IN JAPAN: Alleged to Have Plotted to Assassinate Mikado—Disciples of Kropotkin.

「日本で二十六名の無政府主義者裁かれる：皇帝暗殺陰謀の容疑——クロボトキンの弟子たち」

The greatest excitement was aroused in Japan today by the announcement that the trial of it alleged anarchists arrested three weeks ago for a supposed plot to take the life of the mikado would shortly be begun. Among the suspected anarchists is a woman, Suga Kanno, who will be tried with the others. She is said to be the mistress of ^{ママ} Genjiro Kotoku, leader of the band.

・ ・ ・ ・ ・
Kotoku, according to general belief, brought the anarchistic theory from America, where he went in 1906. He is an ardent student of Kropotkin's publications. It is believed he and his followers were planning a reign of terror, to be brought about by labor difficulties and assassinations.

(抄訳) 皇帝暗殺を企てたとされる無政府主義者グループが三週間前に逮捕され、その初公判がまもなく開かれる。被疑者のなかには菅野スガという、グループのリーダー幸徳の愛人と目される女性も含まれる。当局はこのグループ二十六人を逮捕することで、広まりつつある無政府主義運動の萌芽を摘み取ろうという意図を持っていると思われる。幸徳はアメリカから無政府主義理論を持ち帰り、クロボトキンの著作に没頭している。幸徳とその仲間は強制労働や暗殺による恐怖支配を企てていたものと考えられている。

この記事は、「皇史初の皇帝暗殺計画」を強調した9月22日付の「ニューヨーク・トリビューン」や「ニューヨーク・タイムズ」とは異なり、先ほど触れたように、無

政府主義に論点が置かれている。

クロボトキン (Pyotr Alekseevich Kropotkin: 1842-1921) はロシアの地理学者で、十九世紀末のアナーキズム理論の集大成者であり、明治・大正期の日本にも影響を与えた。彼は「無政府共産制」という標語を掲げ平等思想を徹底させたが、もちろんこの思想は当時の日本の天皇制と相容れないものである。上の記事では「1906年渡米した際」となっているが、秋水は1905年に筆禍事件で投獄された際、すでにクロボトキンの無政府主義思想に関心を持ち始めていた。出獄後渡米し、秋水はロシア社会革命党員と接触して帰国、クロボトキンとの文通を経て、1908年彼の『パンの略取』(1892)の翻訳を公刊しており、この「イヴニング・テレグラム」の記事の「当局は無政府主義の萌芽を摘み取る意図を持っている」という指摘は当を得たものとなる。

また、11月10日付「ニューヨーク・タイムズ」には、以下のように記されている。

PLOTTERS AGAINST THE MIKADO TO DIE: Twenty-six Persons, Including One Woman, Found Guilty by Special Court.

「皇帝暗殺首謀者：女性一名を含む二十六名、大審院で有罪と判決される」

The court recommends “the severest penalty under Clause 73,” which provides capital punishment for plotters against the Imperial family.

(訳) 裁判所は、皇室に対する陰謀について極刑を規定した「第73条に基づく最も厳しい刑罰」を勧告する。

これもまた報知新聞に基づき書かれたものである。まず、これまでのように「皇史初の皇帝暗殺計画」が強調されている。

In the 2,500 years of that empire's history the reverence of the people for the sovereign had been such that there had never been even a suggestion of an attack on the life of a Mikado.

(訳) 二五〇〇年の皇史において、臣民の皇帝に対する崇敬は同じだけ長く続いてきたものであり、皇帝を暗殺する企てなどこれまで一度も思いつかれたことすらなかったのである。

そして、以前の論調と同じように、天皇制に対する反分子として、社会主義者および社会主義思想そのものが槍

玉に挙げられている。報知新聞の「間違いなく死刑を宣告されるであろう」という記述は、反体制側に加担するとどのような末路を辿ることになるのかを示す、いわば「見せしめ」であり「脅し」である。それを部分的に引用することで、「ニューヨーク・タイムズ」は日本の報道事情および天皇制国家の実態の一端を世界に知らしめていたとも言えるのである。

The persons implicated in the plot were members of the “Allied Socialists.” It was stated that their intention was to assassinate the Emperor while he was visiting the Military School in a suburb of Tokyo. The plot, it was added, was discovered in time to protect his Majesty, and the plotters were at once seized.

(抄訳) この暗殺計画に掛かり合っている人々は「社会主義協会」【筆者註：のちに「社会労働党」となる】のメンバーである。彼らの目的は皇帝を暗殺することで、この陰謀は発覚し、首謀者たちは直ちにつかまった。

ところで、73条とは、日本の皇室に危害を加えたり加えようとしたものに対する罪刑を規定した条であるが、この段階で海外において「死刑判決」と「誤報」がなされたことは注目される。このことについて、山泉進は、

内容的には、「公判開始決定」が、非公開の特別裁判所における死刑判決として報道されたところが特長的である。この「誤報」を受けて、真先に抗議運動を開始するのは、ニューヨーク在住のエマ・ゴールドマン等のグループであり、彼らの発した「アピール」を発火点にして、ヨーロッパ各都市へと飛び火していく。(『「大逆事件」関係外務省往復文書』解説、p 11)

と指摘し、また、エマ・ゴールドマンの発刊した雑誌『マザー・アース』に関して、

幸徳秋水や大石誠之助は『マザー・アース』の購読者であり、この雑誌の「インターナショナル・ノーツ」欄にも日本の社会主義運動の記事が掲載されたことがあった。逆に、エマやアレクサンダー・バーグマンの書簡が日本の社会主義者の新聞で紹介されたこともあり、おそらくは、中西部にいた金子喜一や高橋武、あるいはサンフランシスコ・ベイ・エリアの岩佐作太郎等、幸徳秋水や滞米中に結成した社会革命党のメンバー等は何等かの形でエマ等と幸徳秋水等を仲介していたと考えられる。(同、p 11)

と述べている。この文中の「高橋武」が、先の「武ちゃん」であり、『青春の自画像』の、次のような記述からも幸徳秋水との関わりがうかがえる⁵⁾。

『手紙だ、誰からだろう?』

拾い上げてみると、高橋武からのそれで、二人あてによこしたもので、番地はニュー・ヨーク市になっていた。

辰野は、封を切ると読み出した。

『なにになに……(中略) エマ・ゴールドマン女史健在、大いに僕を歓迎してくれたよ。同封の一片僕がシカゴにて書きたる論文、雑誌「マザー・アース」に掲載せられたるもの御笑読下さい。何か面白いことあれば、ご一報下さい。当分は下記におるべし。

番地

1910年2月5日

武より

辰野前田河両雅兄

日本では、目下われわれ同志の検束などひんぴんたる由、噫、ただただ寒心のみ。』

二人は、しばらく押し黙っていた。(中略) 送ってよこした文章は、『Japanese Movement of Proletariat』というので、かなり達者な英文で、自由党左派以来の堺、幸徳一派の運動を仔細に報告していた。

(pp 91~93 「栗の果横町」)

1.3 日本の社会主義に対する海外報道

さてここで、幸徳秋水をはじめ、日本の社会主義について海外ではどのように報道されていたか、管見に入った資料を紹介しておく。

まず、先の11月10日付「ニューヨーク・タイムズ」の記事の最後部には、「アダチキンノスケ」という在米日本人作家の以下のような意見が載せられている。

“A nation should be complimented without stint when, and only when, she shows herself able to survive the test of prosperity and wealth. Rome sank under it; so did classic Hellas, after Babylon and Egypt and Han. To-day the New Nippon is just beginning to face the all-powerful conqueror who comes in silken garments, freighted with gold. The quickness with which the New Nippon is succumbing to the worst poisons of the Occidental civilization is the thing that shocks and astonishes us more than anything else.”

(抄訳) 「繁栄と富の試練に耐えうる場合のみ、国家というものは惜しみなく賛辞を受けるのだ。古代に栄え

滅びた他の国々と同じく、ローマは繁栄と富の試練を受けて沈んだ。今日、新・日本はちょうど、その試練を受け始めたところだ。だが、新・日本が西洋文化という毒の誘惑にあまりにも迅速に負けてしまうのには、何にもまして驚いてしまう。」

この「ニューヨーク・タイムズ」の記事が書かれたのと同じ頃、1910年11月4日付の「ノース・チャイナ・ヘラルド」でも、“Socialism in Japan”（「日本の社会主義」）と題して、日本における社会主義運動の歴史を紹介し、「日本における社会主義運動の始まりは西洋のものなら何でも真似ようとした当時の熱狂のため(Probably it [Socialist association] owed its inception to the prevailing craze for copying everything Western, good, bad or indifferent,...)」と分析する。しかし、この記事ではもっと広い観点から日本の社会主義を総括している。たとえば、

This brief survey of the history of the Socialist movement in Japan will suffice to emphasize the tendency of history to repeat itself. . . . Theories, however, often flourish under ill-treatment and Socialism is of these. At the present day, broadly speaking, Socialism is a graver danger in countries where its repression by forcible methods has been attempted than in those where it has been left to develop unchecked.

(抄訳) 日本における社会主義運動の歴史を概略的に眺めるだけでも、歴史は繰り返す傾向があることがわかる(中略)社会主義思想に弾圧を加えれば加えるほど盛んになる。弾圧を加えた国のほうが、自由に放置した国よりも、社会主義の危険にさらされている。

と指摘している。また、日本での厳しい弾圧の結果が皇帝暗殺計画を招いた、と断言する。

When Marquis Katsura returned to power, however, more severe repressive measures than ever were adopted, periodicals were suppressed and the right to hold public meetings was denied. The result is found in the discovery in September last of a plot to assassinate the Emperor.

(抄訳) これまでにないほどの社会主義者に対する厳しい弾圧措置がとられ、彼らの刊行物は発禁とされ、その集会の権利は奪われた。その結果が、九月の皇帝

暗殺未遂発覚に見られるのである。

また、1910年12月4日付「ニューヨーク・タイムズ」に掲載された、幸徳秋水を擁護する投書をここで紹介したい。以下、見出しと原文の一部と抄訳を示す。

A Condemned Japanese Socialist
「有罪にされた日本の社会主義者」

I learnt that Denjiro Kotoku is an “intellectual” who has devoted his abilities and energies to the spreading of libertarian ideas in Japan. . . . Now we hear that systematic persecution of Kotoku forced him to go into exile in San Francisco. When he later returned to his native land the persecution continued, culminating in the arrest, secret trial and death sentence of himself, his friend, M.Kano, a brilliant translator and litterateur, and all his known comrades; . . . The Government of Japan has absolutely suppressed all information in regard to the trial of Kotoku and the others, and the Japanese press has been forbidden to publish any report on the proceedings. . . . Energetic protests of the Western world will force Japan to terminate its secretiveness and give to the world the proofs of the alleged crime, according to the practice of all civilized countries. — New York, Dec. 1, 1910.

(抄訳) 幸徳伝次郎は「知識人」で、執拗な迫害にも関わらず、日本に自由主義思想を広めるために努力してきた。迫害は続き、幸徳とすべての同志が逮捕され、秘密裁判にかけられ、死刑の宣告を受けるに至った。日本政府は、幸徳たちの裁判に関する情報をすべて差し止め、裁判について報道することを禁じている。西洋世界が強く抗議すれば、日本は秘密主義をやめ、告発されている犯罪の証拠を文明国の慣例に従って世界に示さざるを得なくなるだろう。—— ニューヨーク 1910年12月1日

また、12月26日付の「ニューヨーク・タイムズ」には、

Japanese Plotters Tried in Secret Designs on Emperor’s Life Met by Proceedings Seemingly Outside Constitution: PRESS WARNED TO SILENCE: Fifty Arrested as Anarchists and Socialists Merely—26 Condemned—Japan Fears Red Plague.

(抄訳)「日本の陰謀家の秘密裁判：皇帝暗殺計画に一見違憲の司法手続きで対処：新聞は報道禁止：50人を無政府主義者や社会主義者というだけで逮捕——26人が有罪に——日本は赤禍を懸念」

という見出しで、日本政府の法手続きが不十分であり、秘密裁判が行われていることを報じている⁶⁾。この記事ではかなり詳細に事件の概要を紹介しており、同様の記事は諸外国の各紙にも見出される。海外では社会主義者の抗議行動だけでなく、一般紙においても当初は日本政府の対応に疑問を呈する向きが多かったのである。

1.4 「秘密裁判」から死刑執行まで

前田河のいたシカゴでは、この事件についてニューヨークほどの抗議運動は起きなかったようであるが⁷⁾、『「大逆事件」関係外務省往復文書』によると、在シカゴ領事山崎馨一は1911年1月21日発の外相宛文書で、一般紙である「シカゴ・イヴニング・ポスト」が、1月19日付(日本時間1月19日に死刑判決が出ている)の記事で日本政府の対応を非難したことについて、領事として早速抗議し訂正の記事を掲載させたことを、新聞記事の切り抜きを添えて報告している。以下、その新聞記事と抄訳を示す。

JAPAN AND HER ANARCHISTS

「日本と日本の無政府主義者」

Japan has a constitution which repeats in an absent-minded way most of the guarantees and safeguards so dear to the Anglo-Saxon and so commonly found in his Bill of Rights. Among the excellent constitution is the assurance that no one shall be deprived of life and liberty without a fair and open trial. (後略)

(抄訳)大日本国憲法は考えなしに、イギリスの権利章典と同じ内容をうたっている。この憲法に則れば、何者も生命と自由を公正な公開裁判なしに奪われるものではない。現在の日本の保守派行政では、この憲法を維持できなかったはずだ。24人の容疑者を秘密裁判にかけて死刑判決を下すようでは、日本に立憲政府があるとは言えない。

この記事に対するシカゴ領事山崎馨一の抗議文には大日本帝国憲50条が引用され、この裁判に関する司法手続きが違憲ではないことが主張されている。

From the Consul of Japan

I have read with interest an editorial in THE EVENING POST on the trial of the Japanese anarchists. In writing this to you I do not mean to disapprove your valuable comment upon the case; but I wish to explain the matter to you and to present our view if I may.

The principal criticism seems to be on the “secrecy” of the proceedings. Article 50 of the Japanese constitution provides that “trials and judgements of a court shall be conducted publicly. When, however, there exists any fear that such publicity may be prejudicial to peace or order, or to the maintenance of public morality, the public trial may be suspended by provision of law or by the decision of the Court of Law.” (後略)

(抄訳)「イヴニング・ポスト」の日本の無政府主義者に関する記事では、この裁判における「秘密主義」が批判されていますが、この司法手続きが正当である理由は、憲法50条に「公開裁判が公共の秩序を乱す恐れのある場合は、条項あるいは裁判所の判断に従うこと」と定められているからです。

前掲の「ニューヨーク・タイムズ」(12月26日付)にもあったように、この頃には、「大日本帝国憲法」と「秘密裁判」という問題が論争の中心になっている。すなわち、大逆事件における秘密裁判等の司法手続きが合憲か違憲か、という問題である。

これについては、12月30日付の「ニューヨーク・タイムズ」でも、“EXPLAINS TRIAL OF KOTOKU: Japanese Government Denies Secrecy is Unconstitutional”(「幸徳裁判の説明：日本政府は秘密裁判が憲法違反ではないとする」)と題した記事を掲載している。ここではシカゴ領事山崎馨一の抗議文と同じく、大日本帝国憲法50条が引用され、この裁判に関する司法手続きが違憲ではないという日本当局の主張が載せられている。これは、外務省の働きかけに拠ったものであった⁸⁾が、その前日12月29日は、公判を終えた日でもあった。

一方、同日12月30日付の「ノース・チャイナ・ヘラルド」は「日本の無政府主義者」という見出しで12月9日付のロンドン・デイリー・ニュースの記事を転載し、大逆事件の司法手続きが憲法違反であること、逮捕された26人が半神である皇帝や皇族に危害を加えるような陰謀に加担するはずがないこと、を主張している。翌年1911年1月6日付の「タイムズ」にはジャパン・クロニクル

編集長ロバート・ヤングの投書が掲載されており、それは日本の新聞やロイター電が事実と異なる情報を広めていることを非難し、大逆事件の真相と秘密裁判の実状を暴いている。1月13日付の「ノース・チャイナ・ヘラルド」は「日本の無政府主義者」という見出しで毎日電報紙と時事新報の記事を紹介し、「日本の大衆は無政府主義者に同情し、彼らの犯罪が社会主義者を憎む政府に誘いこまれたものと理解している」と指摘し、そして幸徳が12月6日に書いた友人宛の手紙の抄訳を載せている。

そして死刑判決の出た直後、1月19日付の「ニューヨーク・タイムズ」には、“JAPANESE PLOTTERS CONDEMNED TO DIE: Kotoku, His Wife, and Twenty-four Associates Sentenced for Plot Against the Throne”（「日本の陰謀者たちに死刑：幸徳とその妻そして二十四人の仲間に、皇帝暗殺陰謀の判決下る」）という見出しで、これまで裁判は非公開であったのに判決だけは公開され、外国の大使や日本の要人が証人として判決の場にいたこと、そして判決を下されたあとの幸徳や仲間の様子が述べられている。さらに、判決文の内容を紹介し、幸徳の略歴にも紹介している。

ここで興味深いのは、幸徳がかつてサンフランシスコに亡命した経歴に触れ、死刑判決変更の可能性を匂わせている点である。

It is impossible to obtain a reliable opinion as to whether the death sentences will be commuted, but it is thought possible that exile for life will be substituted for the capital penalty.

(訳) 死刑判決を減刑できるかどうか確かな判断はできないが、死刑に相当する刑罰として国外永久追放に代わる可能性は考えられる。

「秘密裁判が違憲かどうか」という問題に関しては憲法第50条を引用するにとどまり、読者の関心を「幸徳を救えるかどうか」に向けようとした意向がうかがえる。実際、先に引用した「シカゴ・イヴニング・ポスト」の投書のように、死刑判決後の嘆願書は後を絶たなかった。しかしながら、刑は執行される。

死刑執行後の1月25日付「ニューヨーク・タイムズ」には“Rather a Wholesale Slaughter”（「十把ひとからげの虐殺」）という見出しで、次のような記事が載せられた。

Few Governments other than that of Japan would have ventured, in these days, to put to death twelve persons for participation in a murder conspiracy that

not only resulted in nothing, but did not lead to the commission of any overt acts proving a real determination to kill. . . . Still, they hadn't killed anybody, or, so far as known, even come very near carrying out their plan, whatever it was, . . . Underlying and explaining Japan's stern treatment of these plotters is presumably the fact that the Emperor of that country is still, theoretically, something more and higher than a man, and that to kill him would be sacrilege as well as murder. . . . So DENJIRO and all of his closer companions had to die. . . . In most countries the old faith in the deterrent effect of capital punishment has much wanted, but there is no real questioning anywhere of the State's right to defend itself and assure its own safety by killing public enemies — if it cannot think of anything better to do with them.

(訳) 結局は何もなかった上に、殺意の証明になるような公然たる行動もなかったにもかかわらず、暗殺計画に参画したとのかどで、12人もの人間を死刑にするような政府は、最近では日本の他にあまりないだろう。……しかし彼らはだれも殺さなかった。つまり知られている限りでは、その計画が何であろうとその実行に近づいてもいなかったのだ。……日本の陰謀家たちに対する厳刑の背後にあるのは、おそらくあの国の皇帝がまだ理論的に人間より高い地位にあるため、彼を殺すのは殺人であると同時に冒瀆とされているからだろう。……だから伝次郎とその仲間たちは死なねばならなかった。……ほとんどの国では、極刑が持つ犯罪防止効果という考え方は力を失ってきた。だが、国家が公共の敵に対し、殺す以外にどう扱ってよいか分からぬ場合、処刑によって国を守り、その安全を確保しようとする国家の権利に対して本気の反論もまだ見られないのだ。⁹⁾

と、これまで論じてきた秘密裁判や違憲の問題にはもはや触れておらず、ややトーンダウンした、日本政府の意向に添う穏当な記事となっていく。

もちろん、現地社会党の機関紙「ニューヨーク・コール」等には日本政府を批判する記事があり、それらに前田河が目を通して十分考えられるが、一連の報道の過程では、一般紙においても、懐疑的な論調があり、現地の社会主義者が中心となったニューヨークでの抗議行動についても報道されている。前田河が事件についてかなり詳しい情報を得ていたことは疑いないであろう。

2、「二十世紀」読解

2.0 序

“The Twentieth Century”（「二十世紀」）は、前田河の自伝によると、“The Unity of Asia”（「アジアの連合」）“The Mikado’s Crane-room”（「ミカドの鶴の間」あるいは「鶴」）“A New Year Street in Yeddo”（「江戸の正月」）“The Monument”（「戦碑」）に続く英文の短編で、ニューヨークの社会党機関誌「The International」に載ったという。しかし、この雑誌は現在所蔵先が確認されていない。ただ、作品自体はその後、現地の日本語新聞「日米週報」（のち「日米時報」と改称）の二十周年記念号（1920（大正9）年1月1日）に再掲されたものが最近浦西和彦により紹介された¹⁰⁾。しかし残念ながら日本語訳が付されておらず、日本文学者の便を図り、以下に全文の拙訳を掲げる。なお翻訳にあたっては、単語の中に文語的なものがいくつかあり、あえて「乞食」といった訳語も使用した。また、後半部分、“I believe you have forgotten me, sir…… Yake-Miki?”とあるが、これはYaye（八重）の誤植と考えられる。

筆者名については「H. Maidako」となっている。「絞刑吏」では「Heroichiro Myderco」とあり、藤沢も呼称に疑問を呈している。実は前田河自身、アメリカ渡航にあたり書類を整える際にはじめてこれまで「幸一郎」だと思っていた自分の名前が「廣一郎」だと知ったと手紙に書いているぐらいで、また幼い頃は「こういつろ」「こういつ」「こうちゃん」と呼ばれたらしい¹¹⁾。なお紅野敏郎は『現代日本文学大系 59 前田河広一郎 徳永直 伊藤永之介 壺井栄 集』（1973年5月）の「前田河広一郎年譜」の末尾で「戸籍では「まいだこ ひろいちろう」となっている。」と述べている。

(訳) 二十世紀

H. Maidako

佐藤ノボルは、仕事場の半分ほどを占めるキャンバスに、大作『二十世紀』を描き始めた。

後期印象派流の奇抜な主題の捉え方やとっぴな絵の具の並べ方のほかに、画家としての佐藤について、友人の私が知っていたのは、年老いた中国の仏教画家ワッツや陰鬱な絵を描くヴェルスと同じ象徴派の一員であるということだけだった。

江戸川岸のアトリエで佐藤の仕事ぶりを見ていたある日、彼から『二十世紀』の着想を聞いた。そのとき、この作品もまた観念的で象徴的なものであることに気づいても、私はあまり驚かなかった。

「これは、」と、彼は表情豊かに絶えず動く唇に、とがった絵筆をくわえながらこう言った。

「どちらかといえば、我々の世代に風刺の気持ちを生じさせる主題を扱っているのだ。芸術と実物主義、まったく陳腐な主題だ！ しかしね、僕は自分の思うようにこのテーマを描くつもりだ。このキャンバスの上では、どんな自己欺瞞も芸術の王国の奴隷であることも許されない。すなわちこの絵は僕自身を表すのだ。わかるかい。」
「わかるだろう、ゾラ君」——私が象徴派を支持するような粗末な記事をしばしば書いたというだけで、佐藤は私を「ゾラ」と呼んだ。か弱く多感な若者の私には、ゾラの書いた『我が憎しみ』に含まれるような力強さを持って書くことなど夢にも思えなかったのだが！——私のやっていることは何と滑稽な猿真似だろう！「……さて、この、空に向かって両手を広げている女性の姿は「美」の象徴になるのだ」と佐藤は続けた。

「美？」私は、キャンバスのそばの梯子におずおずと寄りかかりながら尋ねた。

「そう、「美」だよ。しかし、パリの婦人用品店の売り子や、わが日本の芸者のような美人の美しさとは違う。「美」とは、パイロンやロダンはもちろんプラトンに靈感を与えることができるようなものだ。たとえば古代の肖像がそれだ。よく均整のとれた姿をし、その内には温かい血が通い、その血の一滴一滴が神聖な魂の雫（しずく）となっている」

「今、この女性は、裸で、ひとりで、この前景に立っている。顔には何の表情も描いていないが、彼女の嘆いている声が聞こえてくるような表情を描くつもりだ。そう、自分の悲惨な運命を天に嘆いているその声が聞こえてくるように！」

「それから背景を見てくれ。ほらここに、さまざまな人間が黒い洪水のようにうごめいている——労働者、女たち、店員、将校、魚売り、娼婦、警官、大道芸人たち——みんな工場や商店や事務所の立ち並ぶ方へ向かっていく。この女性が透き通った陽光の降り注ぐ道の真ん中にこうして立っているのに気付かずに、そのそばを通り過ぎていく。」

「しかし実のところは、こうした人々はみな生計を立てるのに忙しすぎて、彼女にかまっていられないのだ。だから、地下の造幣局から聞こえる鉄槌の音にそれぞれ耳をそばだてながら、害虫が湧いて夥しく流れていくように、人も溢れて絶え間なく流れていく！——もちろん、この作品は僕の気取った道楽にすぎない！好きなだけ時間をかけて仕上げてもかまわない。でも、僕がこれを完成したあかつきには、東京市民はみな、我々象徴派の放つこの予期せぬ爆弾の炸裂に眩惑されて、作品の前に

は黒山の人だけができるだろう。」

確かに、彼の言うことには、芸術家世界にはびこるあの嫌気のさすような悪弊、つまり自惚れは少しも感じられなかったし、いい加減な絵を描いて材料費を稼ごうとする未熟な絵描きのような雰囲気もなかった。彼が高邁な才能の持ち主であるという印象は、変わらなかった。というのも、それまでに私は白馬会で高く評価された彼の象徴派作品を数多く見ていたからだ。

構図について聞かされたあと、キャンパス上でそのような重要な役割を演じることになるモデルについて、いろいろと知った。ここで言うっておかねばならないが、佐藤はもっぱら外国で美術について学び、パリにもフィレンツェにも留学したが、根っからの日本人であった。何年も外国で学んだ結果、彼がもっともよく知ったのは——日本だった！ エマソンのいう「light, not heat (明るい、熱くはない)」距離で、彼は「日本」という女性を見た。青いイタリアの空の下で、あるいは、曲がりくねったセヌ川のほとりで、彼があてもなくぶらぶらと空しく歩いている間、その女性はほんやりとした追想の中に現れた。そして彼は、自国の芸術の神秘を手つかずのままにしてきたことを悟り、しばしばはっとさせられたのだった。

帰国して以来、佐藤は、自分の夢見た東洋を誇りにし、日本の女性を理想として描くことで大いに満足した。それ故、『二十世紀』の「美」のモデルは東京の娘でなくてはならなかった！ モデルは「お八重さん」といって、白馬会専属のモデルの中でも最も美しかった。か弱そうな女性で、しなやかな肢体を持ち、顔にはロマンチストの雰囲気を漂わせる青白いこめかみ、特徴のある頬、大きく黒い瞳が見られ、首筋は着物を着ているためにわずかに前にかがみ、その黒髪は夜の暗さを思わせる漆黒で、ひじまでかかるほどたっぷり長かった。それは芸術家の目を釘付けにしてしまうほどの見目麗しい姿で、彼女を見ているとまるでニンフかヴィーナスを思い浮かべた。佐藤はあらゆる点で彼女に満足したが、特に彼女の胸の形を賞賛した。彼はそれを「ヨーロピアン・バスト」と呼んだが、着物を着る日本女性にはまれにしか見られない形だった。

佐藤は、帰納的事柄としての教育について哲学風に論じ、何か空想めいたことを彼女に話し続けた。その話に応じて心身に収縮が起こり、彼女の顔の表情にもしばしば反応が起きた。

そして、このように画家とモデルは同じ距離を保ったまま、日々の骨折リ仕事へと向かった。すなわち、一人は半ば気がふれたように、現実の世界を理想として描いて夢に変えることに熱中し、もう一人はその理想が肉体

を備えたものとして表わされるために相手の前に立ち、じっとしているという労働で毎月いくらかの金を稼いでいた。

私が『芸術』や他の雑誌で宣伝したにも関わらず、何か月経っても絵自体が完成しなかったし、「美」の指先さえも描き上がらなかった。

いくつか雑誌社が作品を見に集まってきたが、「次の世紀が来るまでに『二十世紀』を見せてくれよ」と、あてこすりを言う者もあった。

半年が過ぎ、一年が過ぎ、そして次の半年が過ぎた。しかし、桜吹雪の舞う江戸川の堤防沿いの、日当たりのよいアトリエからは、あせりの溜め息は全く聞こえなかった。そして、ある日、画家は私を呼び出してこう言った。「ゾラ君、僕はあの作品をあきらめたよ。モデルには全く失望してしまった。中心の人物像に満足できないのだ。彼女はとうの昔に解雇したよ。」

それから一年後、黄海で、キナ臭さとともに、あの恐ろしい日露戦争が始まった。幸か不幸か、私は東京新聞の従軍記者に任命され、天津経由で戦場へと出発した。二年後、私は戦争を思い出すと動揺して吐き気を催すほどの精神状態で、横浜の波止場に降り立った。そのとき、私の魂はすっかり芸術に飢えており、なによりもまず、あの絵のように現実離れたアトリエに、我が親友を訪ねたのであった。

「ああ、よく来たね、物書きよ！ 新疆から手紙をもらって以来音沙汰がなかったの、とても心配していたよ。おそらく流れ弾にやられたのかと思っていた……。いい時に戻ってきてくれた。太平洋画会の毎年恒例の展覧会が、奉天の戦いよりも激しい戦いを始めたところだ。つまり、芸術の勝利のための戦いだ！ さあ、行って見よう。僕も小品を何点かと『仏陀とその弟子』を出品したのだが、暇がなくて行ってないんだよ。」

外には、何でも飲みこんでしまう巨大な怪物のような首都・東京があった。そこには無数の提灯や爆竹、旗、記念碑やアーチがきらめき、人々はなだれのように押し寄せた。その口々から発せられる「万歳！」という叫び声は、百万の大砲のように響いていた。

こうした生き生きとした表情を見せる東京の狭い通りは、全くごった返していた。疲れきった傷病兵、田舎から来た人たち、父親ほどの年の軍人を歓迎する学童の群れ、新聞記者、抜け目のないスリ、物乞いたち——「戦争」という恐ろしい母親から生まれたやつれた子どもたち、みんながみんな、叫びすぎてしゃがれた声で、自国の「勝利」を喜んでいて。

心の中で私は、江戸時代の上品な作法を思い浮かべていた。江戸城の舞姫たちが月光のように輝く絹物を優美

にまとい、藤の花びらがひらひらと舞い落ちるなか、象牙のように白い指で桃色の扇をくるくると回しながら踊る姿を。あるいは、「武士は食わねど高楊枝」や「義理人情」のように、誇りある高潔な侍の精神を。

江戸の通りには、夢のように美しい柳や背の高い松が点在し、所々に朱塗りの木の橋が横たわり、白い城の翼壁や古い神社の神秘的な階段が波のようにうねっていた。そこには、今私が目に見ているような、飢えて醜く目つきの鋭くなった場違いの者どもが押し寄せたりすることはなかった。

その昔、白衣の将軍の白い天蓋の下で、民衆の祝祭は純真で高潔で、匂い立つ梅の花のようであった。——だが今、同じ通りは、破廉恥で無作法で粗暴な男女に蹂躪されている……ああ、我々の日本は何処にあるのか？ 汚れなく歓びに溢れたアジアの理想である日本よ、君は今、何処にいる？

それから、私は思った。我々の時代は、なんと奇妙で冷酷なのだ！ これほど短い間に、過去のおぼろげな光景がみな消し去られ、こんなにぞっとする血なまぐさいモダニズムがつきつけられるなんて！ あの頃、「美」はここにあった。「美」は至るところにあった。しかし、今や、どこにもない！

佐藤も私と同じ思いだったに違いない。彼の想像する光景は、おそらく私が思い描くのよりも、構図も色合いも、ずっと激しいものではあっただろうが。

「あら、佐藤さんではありませんか？」

この声で突然、ちょうど展覧会場の前で我々は夢から覚めた。ますます増え続ける人の流れの中から、その声の主である女性が歩み寄ってきて、佐藤に話しかけ、我々の膝ほどまで深くお辞儀をした。

「ええ、佐藤は私ですが。失礼ですが、どなたでしょう？ 何の御用でしょうか？」

彼女が髪の手を上げたとき、我々が見たのは、頬骨が高く、醜い鼻をした、おまけに頬には紫色のしみが点々とついた中背の女が、はにかみながらこちらに微笑みかけている姿だった。

「お忘れだと思いますが——『二十世紀』のモデルをした、三木八重でございます。おぼえておいでですか」

この、これほど醜い女が「美」のモデルだって？ ありえない！

しかし、事実は小説よりも奇なり。この場合、それ以上だった！ もの悲しく笑うと醜い黄色い歯が見えるこの乞食のような女の中に、だんだんとあの美しいお八重さんの面影が認められてきたのだった。

しばらく沈黙が続いた後、佐藤は女の腕を乱暴に鷲掴みにし、会場の入口から明るい所へ引きずっていき、そ

こで医者が患者にするように、しばらくの間女をよくよく見た。

この気まずい間に、女の幽かなすすり泣きが聞こえ、それは突然ほとばしり出るような泣き声に変わった。その泣き声の合間から、しゃくりあげながら途切れ途切れに、こう聞こえてきた。「私はもう一度昔の自分を見たい。昔の私を！……私の絵をどうなさったの？ どうか見せて頂戴！ そしたら私は満足して死ねるわ……。ああ、あの頃の私はなんて優美だったのでしょうか！…… そうよ、そうだわ、二人目の夫を亡くしてからまるで悪魔のように生き延びて台湾から戻ってきたのは、このためなのよ！……」

「首都！首都よ！ やっと手に入れたわ！ さあまた始めましょう！ そうよ、首都を手に入れたのよ！」

この哀れな女を慰める代わりに、佐藤は女の腕をつかみ、一緒に通りを駆け出した。私のことはすっかり忘れて。何というふるまいだ！ 佐藤は天来の気まぐれを起こしたのだろう。

だが、あんなグロテスクなものをどうしようというのだ？ 今度は私があわてて、彼らの後を追いかける番だった。

彼らよりも少し遅れてアトリエに着いたとき、佐藤はまるで家が火事になって貴重品を詰め込んでいる人のように狂暴になって、パレットの上で絵の具を混ぜていた。

それから、一筆一筆、何色かの濁った、吐き気を催させるような絵の具を使って、前と同じ『二十世紀』のキャンバスを描き直し始めた。

一時間後、我々の前には美しい身体をした女性の肖像があった。だが、美しい肉体と痛烈な対照を成すように、その顔は胸の悪くなるほど醜いものだった。背景は、急速に流れていく人波と現代産業施設の眺望という、前と同じものだった。それから、佐藤は自己満足した微笑を私に向け、妙な仕方では絵の具で汚れた手を振りながらこう言った。「ゾラ君——いや、森君——、ついに私は傑作を仕上げたよ！」

「……わからないかい？ 象徴はこれだよ。二十世紀という時代は我々の「美」を、このような醜いものに変えてしまったのだ！」そう言って彼は絵筆を拭いた。

2.1 題材

さて、その内容であるが、二十世紀(1901年)とその後の日露戦争前後を舞台とする。前田河の渡米は1907(明40)年であるから、自らの渡米前の日本を題材に書いたことになる。ロシアに宣戦布告したのは1904(明37)年2月10日、ロシア軍が降伏条件に調印したのは1905(明38)年7月31日、日露講和条約(ポーツマス条

約)である。1904年当時彼は中学四年生、成績不振であり、その後五年生の時に落第し退学、日露戦争が終わった年の秋に、徳富蘆花の家を訪問することになる。

登場する「白馬会」「太平洋画会」は実在のものである。「白馬会」は1896(明29)年6月6日、黒田清輝等、東京美術学校の西洋画科のメンバーが中心となって設立され、1911(明44)年3月8日、所期の目的を達成したとして解散された(「国民新聞」3月10日付)。また、太平洋画会は、明治美術会の後身として1901(明治34)年11月21日結成されたもので、春に恒例の展覧会を開催している。特に1905(明38)年春の展覧会は「美術新報」にも二回にわたり批評が掲載され(「美術新報」第4巻3号、明治38年4月20日～第4巻4号明治38年5月5日)、世間の関心も高かったようである。

人物についてはモデルがいたかどうか確定はできないが、当時日本でも作品が紹介されていた実在のイギリスの画家ワッツ(George Frederic Watts, 1817-1904)や、ベルギーの画家ヴィエルス(Antoine Joseph Wiertz, 1806-1865)¹²⁾の名前を借用した可能性もある。

また前田河は小学生時代一番好きなのは図画の時間で、彼自身も絵が得意であった(中田幸子『前田河広一郎における「アメリカ」』p 17)。在米時代、肖像画を描く仕事をしてきたことも「……正直な不正直な百姓を相手に肖像画を商って居ます……」(「徳富蘆花に寄せた前田河広一郎の在米通信 三」、『武蔵野ペン』第三号、1959年6月、所収)、「……肖像画を千四百枚画きました。」(「徳富蘆花に寄せた前田河広一郎の在米通信 四」、『武蔵野ペン』第四号、1960年1月、所収)等の記述からわかる。さらに自伝的小説『人間(大陸編)』(1939年1月、六藝社)でも、主人公の谷口久平は肖像画を描く仕事に携わったことになっている。徳富蘆花に紹介してもらった新紀元社で雑務をする間に様々な文化人とも接しており、美術界の動きにも疎くはなかったであろう。

2.2 ゾラの影響

エミール・ゾラが、近代日本文学に与えた影響については今更述べるまでもないが、本作品では、特に以下の点において、ゾラの作品の影響が窺える。

まず、「My Hatred(私の憎しみ)」の語であるが、これはゾラが「サリュエ・ビュブリック」誌ほか諸新聞に書いた文学・芸術評論を集成した『わが憎悪』(Mes Haines, 1866 Faure.) から来ている。邦訳は確認できていないが、前田河は在米時代、様々な書物を読破しており、ゾラを英訳(あるいはフランス語)で読みこなしていたことは、「徳富蘆花に寄せた前田河広一郎の在米通信 四」(『武蔵野ペン』第四号、1960年1月)に次のよう

に述べられている。

先生

覚束ない仏蘭西(語)と英語とで「ゾラ」を研究しております。

また『青春の自画像』には以下のような記述もある。

私の勉強はあいもかわらず小説類である。ゾラ、モーパッサン、それからゴンクール兄弟、メリメあたりまで、私の手が伸びつつあった。(中略)アスワート・テムペラントとゾラは云ったが、(後略)

(pp 90~91 「栗の果横町」)

私は出来るだけ勉強しようと思った。小説家に学校なし、と断言はしても、満更手ぶらで、玉突きばかりしてはいられない。

私は、『ラ・ソリーエ・ド・メダン』のグループの中から、『ルタック・デ・ムーラン』の作家を選んで、専心ゾラの研究に身をゆだねた。ゾラといっても、初期の諸作から『パスカル博士』にいたる一連の遺伝物が二十五六冊ばかりあるし、それに『三都市』と晩年の三部作を加えると、ちょっとした嵩になる。『夢』だとか、『大地』だとか、『天才』だとか、それを一冊一冊、手当たり次第の英訳本で読み漁っていくうちに、いつのまにか、夏もすぎ、秋になり、手元には十五六巻のゾラがあった。

(p 94 「栗の果横町」)

また渡米してまもなくスプリングフィールドという町へ行ったときのことを、「朝あけについたその町は、かつて荷風の反訳で読んだ、エミール・ゾラの小説を思わせる、煤煙につつまれた駅の辺の裏町そっくりのところで、」(『青春の自画像』p 59)とも述べている。

さらにゾラの『制作』という作品が、この「二十世紀」と若干関わりがあるように思われる。共通点としては、次の点が挙げられる。

1. 主な登場人物が友人関係にあるジャーナリストと画家であり、いくぶん実在の人物および史実に基づいている。

『制作』の記者と画家は、当時雑誌社に勤めていたゾラと、画家のマネやセザンヌがモデルである。前田河も雑誌社での仕事の経験があり、語り手の「私」と前田河自身、ゾラを重ね合わせているようである。画家のモデ

ルに関しては、前田河と交流のあった白馬会の画家たちであろうか。ちなみに、前田河のメタフィクションとも呼べる『人間（大陸篇）』に「二十世紀」の概略があり¹⁹⁾、美術評論家である「私(Mori)」は「森」となっているが、画家の「佐藤ノボル」については、名前が掲げられていない。ゾラは『制作』の最後で主人公の画家を自殺させたため、作品刊行後、セザンヌとの三十年来の交友が絶えた。前田河の場合、画家のモデルを特定せず、作品を英語で書いたうえ日本語訳も出さなかったため、この点ではゾラの轍を踏まなかったともいえるだろう。

2. 『外光』というタイトルの絵が前半のモチーフになり、モデルの裸婦像の描き方が似ている。

『二十世紀』というタイトルの絵は、『人間（大陸編）』の概略では以下のように説明されている。

若い処女をモデルにして、両手を高くさしあげて、朗らかに春の光に呼びかけてゐる構図である。透き徹るほどの乙女の肉體を、ま上から照らす日光は、この世で人の目に映じた光のうちで最も淨い、柔かな光であつた。

この構図は、『制作』で画家クロードがのちに妻となる乙女クリスチーンをモデルにして描いた『外光』の構図に似ている。『外光』はマネの『草上の昼食』（1863）の再現であると考えられるが、細部においては、「セザンヌの『モデルヌ・オランピア』（1873）に近いものがある」（清水正和『ゾラと世紀末』国書刊行会、1992年、p 55）。特に『モデルヌ・オランピア』の女性の描きかたを見ると、先に引用した概略の「二十世紀」の裸婦像がそれに酷似していることがわかる。

また、奇しくもゾラが『制作』を発表した1886年は、モレアスが『象徴主義宣言』を発表し、4年続いた印象派展が最後に開かれた年でもあった。日本に印象主義が導入されたのは1893年、「外光派」と呼ばれるグループを生み出し、その「外光派」の画家たちが中心となって1896年白馬会が結成され、また1902年には白馬会に対抗する形で太平洋画会が興された。印象派が白馬会に引き継がれたのと並行して、十九世紀末を描いたゾラの『制作』は前田河の「二十世紀」に甦り、脈打っているのである。

3. 画家は首都を背景にした裸婦像という大作に取り組むが、モデルの女性を描くのに苦勞し、完成しない。

『制作』で描かれる絵の背景はパリ・シテ島であり、

「二十世紀」の場合は東京の生活風景である。

『制作』の画家クロードが『外光』のあと取り組んだ作品は『シテ島と裸婦』で、裸婦像はパリの象徴であり、クロードは「外光派」から象徴的寓意画家へと変わった。しかし裸婦像がなかなか完成せず、画家は絵の女に生命を込めようと躍起になり、次第に狂気を帯びていく。モデルを務める妻は今や自分の分身ではなく *femme fatale* ともいえる絵の女から夫を取り返そうとするが、画家はついに絵の女の前で首を吊る。

一方「二十世紀」の画家は後期印象派風の筆を持ちつつ象徴派に属する画家であり、「美」を象徴する裸婦像を描こうとする。『制作』と大きく異なるのは、絵の中の女が *femme fatale* になるかわりに日露戦争勃発とともにモデルの女性八重子が突如姿をくらまし、画家が「二十世紀」の完成をいったん断念する点、および結末である。

絵の中の女に関しては、『人間（大陸編）』に記述された「二十世紀」の「概略」のほうが、「二十世紀」よりも詳しく具体的に描写している。日露戦争後「蒼ざめ、糞れはたてで立ってゐる」八重子を見つけ、画家は彼女に身の上を訊ねてすぐアトリエに戻り、「死色を帯びた繪具のタッチを入れ……悲しげな表情の、一人の女が、冷めたい、蔭のやうな光の下に、差上げようとする両腕も力なく、天にむかつて號泣してゐる圖」を仕上げ、これを「二十世紀」の象徴とする。この女性像は、明らかに「二十世紀」で「佐藤」が最初に構想していた「美」の象徴と呼応する。

……さて、この、空に向かって両手を広げている女性の姿は「美」の象徴になるのだ（中略）今、この女性は、裸で、ひとりで、この前景に立っている。顔には何の表情も描いていないが、彼女の嘆いている声が聞こえてくるような表情を描くつもりだ。そう、自分の悲惨な運命を天に嘆いているその声が聞こえてくるように！

「二十世紀」の結末では、八重子の方から話しかけ（「概略」では画家の方から声をかけたことになっている）、佐藤は彼女をアトリエへ連れて行き、「一筆一筆、何色かの濁った、吐き気を催させるような絵の具を使って」裸婦像を仕上げる。前と同じ東京の背景に「美しい肉体と痛烈な対照を成すよう」な「胸の悪くなるほど醜い」顔が描かれ、「二十世紀」が「美」をこのように変えてしまったことを象徴する。

ゾラの『制作』においてイメージされた『モデルヌ・オランピア』の優美な女性像は、前田河の「二十世紀」

において、モデルの八重子を媒体として「美」の象徴となり、やがて日露戦争後、モデルの八重子と同様に醜い変貌を遂げ、表現主義絵画の娼婦像を思わせるような裸婦像として「二十世紀」の象徴となるのである。

このように、『制作』と「二十世紀」は登場人物、絵のモチーフ、裸婦像を描くのに苦勞する点などが類似し、前田河がゾラのこの作品を念頭に置いていたことは間違いないだろう。但し、『制作』はゾラが自らの作品創造の苦しみを告白した自伝的小説であり、もちろん自然主義の長篇小説であるのに対し、「二十世紀」は日露戦争を境に変わった祖国の姿を、前田河が異国アメリカより眺めて書いた、象徴主義の短篇小説といえる。

さらにゾラとの関連は、ゾラと「ドレフェス事件」、前田河と「大逆事件」という並行関係で捉えることもできる。前田河も読んだと言及しているゾラの『三都市』のなかの『パリ』(1898)という作品は、共和制に対する社会不安から社会主義運動が活発になり、アナキストの爆破テロの横行する世紀末のフランスの社会情勢を映し出している。ゾラは1894年に起きたドレフェス事件の擁護派の先頭に立ち当時のフランス軍部と対立し、この『パリ』が刊行された年には、あの有名な大統領宛ての公開状「私は告発する！」を発表し、軍部侮辱罪でロンドンに亡命を余儀なくされた。そして翌年帰国のうち、1902年死亡、反ドレフェス派により暗殺された疑惑が濃厚である。

本論の冒頭でも触れたように、前田河は確かに“The Hangman”において幸徳事件を扱ったが、日本ではなくアメリカで執筆し、しかも英語で書いた作品である。一方、ゾラはパリに住み、作品『パリ』で共和制腐敗の告発およびカトリシズム批判を行い、社会の不正と腐敗と真っ向から戦った。残念ながら、前田河本人も「二十世紀」の「私」の口を借りて認めるように、前田河はゾラには毛頭及ばない。だが、前田河の恩師のような存在である徳富蘆花は、前田河にとって、そして彼の同時代人にとって、日本人のなかでゾラに最も近い人物像であるかもしれない。徳富蘆花が大逆事件に対してとった行動について、次のような指摘がある。

大逆事件にたいして、わが国の知識人のほとんどがまったく無力であった。かつてドレフェス事件の非を糾弾したフランスの作家ゾラに比すべくもなかった。……そのような知識人の多いなかで、……徳富蘆花は事件から大きなショックをうけ、「天皇陛下に願ひ奉る」の一書を「朝日新聞」に投じて「被告」の助命をはかった。またおりから招かれた第一高等学校の演壇

に立って、「謀叛論」と題する講演をおこない、政府の思想弾圧に批判をくわえるとともに、社会革命の必然と人間革命の必要とを説いた

(『幸徳秋水全集 補巻 大逆事件アルバム—幸徳秋水とその周辺—』明治文献、1972年4月、p 113)

『パリ』は日本でも1908年に翻訳されたが、内務当局により発禁となった。しかし、『制作』のみならず、『パリ』でゾラの描いた十九世紀末の狂乱と喧騒も、前田河の描いた「二十世紀」の姿の源泉であったことは、言及に値するだろう。

むすび

—前田河の目指したもの—

前田河は後に英文を捨てるが、それは、アメリカの人々が結局「ゲイシャ・ガール」「キモノ」「ヨシワラ」「フジサン」といったものを求めているのに気付いたからであった。

同じく絵師を題材とした「ミカドの鶴の間」が、「幻想的・耽美的・退廃的、そしていわゆる西欧人の抱くロマンティックでエキゾティックな日本趣味を満足させるような……むしろアメリカ人好みのもの」(中田幸子『前田河広一郎における「アメリカ」』p 57)であったのとは違い、「二十世紀」の中盤では、江戸時代、この国独自の哲学があった頃の美、日露戦争後の偏狭ナショナリズムとは異なる立場からの日本の原風景賛美、といったものを述べ、全体的に、近代化社会そのものの醜さを描く作品に仕上がっている。それは、「三等船客」に対する青野季吉の評「作品の底からは近代文明にたいする人間的な怒りといったものが強く押してくる感じで、べつにはっきりしたプロレタリア的な立場があるというのではない。」¹⁰と共通する。

アメリカで彼は自らも地を這うような労働生活を続け、近代的、資本主義社会であるアメリカを「富んだ米国、高慢な米国、無邪気な米国、不器用で強い米国、粗暴で自由な米国」とよび、「米国の道徳は商業道徳にすぎぬ」とも書いている(「徳富蘆花に寄せた前田河広一郎の在米通信 三」、『武蔵野ペン』第三号、1959年6月、所収)。そして結局「僕の社会主義というのは、やはり日本主義なんだな、このアメリカには向かないんだよ」(『青春の自画像』p 169)と述べる。

「日米週報」二十周年記念号にこの作品が再掲されたのは、実はその時期前田河が編集長として関わっていたからで、『青春の自画像』には「最後に、英文欄に、私の『二十世紀』を、埋め草の一つとして挿入した。」(p

236「二十周年記念号」とある。この作品を選んだということは、彼自身の思い入れもあったのであろう。彼自身、外から日本を「light, not heat」の距離で見る経験をしており、当時の思想を超越した、真の民族意識といったものを作中に示唆している。またそれは今日的な問題でもある。「未完成な作家」（青野季吉「前田河広一郎論」¹⁵⁾）と称された彼は、やはり早く生まれすぎたのであろうか。

《注》

- 1) 「前田河広一郎の“The Hangman”発掘—THE COMING NATION 所載作品—」（「国際関係研究（総合編）」第20巻第3号、2000年3月）。
- 2) 「《資料紹介》前田河広一郎の英文による短編」（「札幌商科大学論集 人文編」第32号、1982年12月）。
- 3) “The Unity of Asia”については、鶴戸口哲尚の日本語訳がある（季刊「BOOKISH」創刊号、2002年5月）。
- 4) 注1に同じ。
- 5) 金子との交流についても記述があるが、時期は明記されておらず、自作年譜には“The Hangman”の発表が縁で知ったとある。一方で自伝の小説『人間（大陸編）』には、「二十世紀」の原稿に手を入れてもらったとされている。
また、シカゴ・イヴニングポスト紙の文芸部主任フロイド・デルとの出会いについても、“The Hangman”執筆後として書かれている。一方小久保武「金子ジョセフィン伝抄」（「本」2（7）、1977年7月）には1911年頃には金子を通してジョセフィン・コンガーと知り合っており、中田幸子は“The Hangman”について「前田河が自作品をこの出版社へ送ったのは、ジョセフィン・コンガーの紹介等によってであろう」としている（『前田河広一郎における「アメリカ」』国書刊行会、2000年10月、p 49）。
- 6) 日本語訳は『外国新聞に見る日本』④（1993年9月、毎日コミュニケーションズ）に拠った。
- 7) 山泉進は『「大逆事件」関係外務省往復文書』の解説で、エマ・ゴールドマンが1911年3月号の『マザー・アース』に書き残した次のようなことばを紹介している。「シカゴについて最も残念なことは、我々の友人に幸徳追悼について関心を抱かせることができなかったことである。講演者がいなかったし、その上、日本は余りにも遠かった。アナキストでさえも距離を克服することは容易ではない。」（p 20）
- 8) 『「大逆事件」関係外務省往復文書』の山泉進による解説、p 17～18に詳しい。
- 9) 日本語訳は『外国新聞に見る日本』④（1993年9月、毎日コミュニケーションズ）に拠った。
- 10) 浦西和彦「前田河広一郎の英文による短編小説「THE TWENTIETH CENTURY」（「二十世紀」）の紹介」（関西大学「国文学」第83・84合併号、2002年1月）。
- 11) 中田幸子『前田河広一郎における「アメリカ」』p 17。
- 12) なおWiertzの発音について、『岩波=ケンブリッジ世界人名辞典』（1997年11月）では「ヴィールツ」、『岩波 西洋人名辞典 増補版』（1982年12月）では「ヴィエルス」の見出しで載っているが、実際の発音はドイツ式では「ヴィエルス」、フランス式では「ヴィールツ」に近い音である旨、本校の桐川修先生（ドイツ語）よりご教示をいただいた。
- 13) 以下にその全文を掲げておく。
そのうちに、久平は、アメリカの原稿は全部タイプライターで打たなければ、編集者は見向きもせぬものといふことを、高山健から聞いた。最も軽蔑すべきものとして罵つてゐた機械文明の機械が、やはり、一日に二十枚も肖像画を仕上げると同じ様式で、久平の最も尊敬してやまない文学にも潜りこんできてゐた！
しかも、この機械は、いろいろな會社の競争で、一週間一弗で賃貸するといふのである。
久平は、この問題をどう解決していいかに、しばらく迷つた。そしてある日、タイプライター屋の中へはいつて、機械借用方を交渉してゐたときには、次のやうな『二十世紀』と題する短編の原稿が出来あがつてゐたのであつた。ここには、その概略の筋だけが記載される。——
二十世紀がはじまつたといふ年に、すこし氣狂ひじみた畫家が、『二十世紀』といふ題の油繪の新作に取りかかつた。若い処女をモデルにして、両手を高くさしあげて、朗らかに春の光に呼びかけてゐる構圖である。透き徹るほどの乙女の肉體を、ま上から照らす日光は、この世で人の目に映じた光のうちで最も淨い、柔かな光であつた。
美術評論家である森は、この描きかけの畫布に接して、日本にもはじめて偉大な洋畫が出現しつつあることに氣づいた。
そのうちに、日露戦争がおこつた。モデルの八重子は、ある日、いつものセッティングを断つて、どこかへ姿を晦ましてしまつた。従つて、畫布『二十世紀』も半分しか出来あがらずに、アトリエの隅に立てかけて置かれた。

森は従軍記者として親しく満州の戦場を見て、いまさらロシアの野望によつて惹起された戦争の、言語に絶して悲惨なものであつたことに、心がふさがれて歸國した。

白馬會が開かれた。畫家と二人連れで上野に出た森は、群衆のあひだに、曾て『二十世紀』のモデルをつとめた八重子が、蒼ざめて、窶れはたた姿で立つてゐるのを見た。畫家は、それと氣がつくと、女にむかつてその後の生活を訊ねた上、自分の出品してゐる展覽會をも忘れて、またアトリエへ引返して、『二十世紀』の畫布へ大急ぎで、死色を帯びた繪具のタッチを入れはじめた。出来あがつた繪は、悲しげな表情の、一人の女が、冷めたい、蔭のやうな光の下に、差上げようとする両腕も力なく、天にむかつて號泣してゐる圖のものであつた。

『森さん、これが「二十世紀」です!』と畫家は、よごれた手を畫面へむけて振つた。

(「三人」 p 328~330)

- 14) 『現代日本小説大系』第四十巻、1951年9月、河出書房、解説 p 321。
- 15) 『現代日本文学大系 59 前田河広一郎 徳永直 伊藤永之介 壺井栄 集』付録、1973年5月、筑摩書房。

《その他参考文献》

『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第1巻、1987年10月、ぎょうせい

『近代日本史年表』1968年11月(第1版)、1984年5月(第2版)、岩波書店